

キャリアから考える学生協働

平尾 元彦

要旨

全国の大学図書館に学生協働の活動が広がっている。図書館の運営に主体的にかかわる学生生活動であり、図書館をよくするという目標のもと、学生スタッフは大学職員とともに業務に取り組む。学生協働は、図書館マネジメントへの参画を通じて「キャリアを育む場」でもある。変化の激しい時代に図書館の変革にかかわることで「変化を巻き起こす人」の資質を身につけることができる。このとき、学生の成長を促す点で職員の役割は大きい。学生協働のメンバーは、「学生協働の理念を明確にする」「図書館以外のことにも興味を持つ、考える、動く」「組織運営を学び、チームで働く力を身につける」ことを意識すべきである。本が好きだから、図書館が好きだからを超えた、活動の意義を見出すことが肝要である。

キーワード

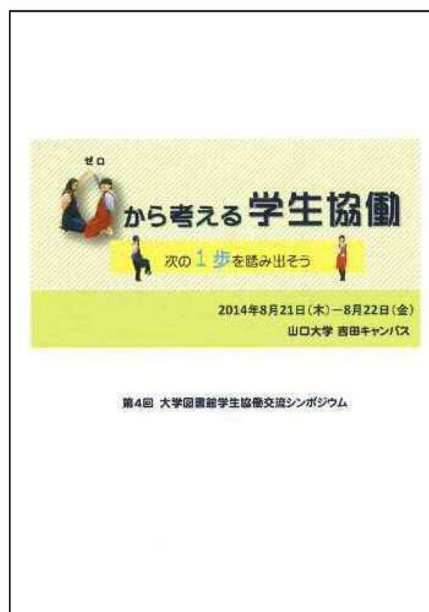
大学図書館 学生協働 キャリア 主体性 インターンシップ 図書館マネジメント

1. はじめに

2014年8月21日(木)と22日(金)の両日、山口大学吉田キャンパスで「第4回大学図書館学生協働交流シンポジウム」が開催された。島根県・山口県の4大学の企画ではじまったこの取り組みも4年目。全国各地から28大学143人の学生・教職員が集まった。テーマは「ゼロから考える学生協働～次の1歩を踏み出そう」。図書館の学生協働のあり方をおおいに議論した2日間であった¹⁾。

筆者は、初日冒頭の基調講演「キャリアから考える学生協働」を担当した。図書館の職員でもなければ図書委員でもない。もちろん利用者ではあるのだが、図書館を研究対象としているわけではない。そのような者に基調講演を依頼するという事は、そこに何かの意図があるはずだ。それはきっと“チェンジ”だろう。確かにテーマに「ゼロから考える」と書いてある。きっと新たな一歩を踏み出すきっかけにしたいと考えているのか・・・と想いをめぐらせながら、基調講演を引き受けることとなった。

本稿は、この日の講演内容をもとに、あらためてキャリアの視点で学生協働の意義を考えたい。そして今後の展開について、学生たちと職員へのエールを含めてとりまとめてみたい。



第4回大学図書館学生協働交流シンポジウム パンフレット

2. キャリアの視点で大学生活を考える

キャリアとは、経歴・経験を意味する言葉である。職業を通じて獲得する「生きる力」とも言えるだろう。大学生がこれまでの学業で獲得した力は、もちろん将来にわたる社会で生き抜く力につながっていく。講義や演習で学ぶこと、読書や議論を通じて学ぶこと、部活動やアルバイトで学ぶことなど、学ぶ経路は様々なものがあるだろう。図書館の学生協働もそのひとつ。図書館スタッフの一員として活動に参加する学生にとっては、大学での学びのひとつと位置付けることができる。

学生協働とは何かについては後述するが、この名称を冠したシンポジウムに全国から学生・教職員が集うところを見ると、関係者の間では定着している言葉なのだろう。たとえば山口大学総合図書館の学生協働のメンバーは約40人。カウンター業務に携わるほか、「お宝展示ワーキング」や「破損本マスターズ」といったワーキンググループにわかれて活動する。職員とは定期的な会合を持つとともに、年に数回の食事会で交流を深める。活動内容やコンセプト、そして、呼称は各大学によって異なるが、図書館にかかわる学生スタッフという点は共通する。こうした活動が全国の大学図書館に広がりつつある。

本論の主題でもある「キャリアの視点」とは、生涯にわたる生きる力（働く力）を育む観点からモノを見るということ。ここで言う「力」には、知識や技能（知っている・できる）だけではなく、価値観や動機・意欲も含むと考える。

ところで、企業が採用選考にあたって重視する項目の上位にはいつも、「主体性」がある。主体性とは、自ら考え自ら行動するという。単に、やれと言われたからやるのではなく、なぜ、そうするのかを自分なりに意味づけをして、行動につなげる能力である。最初からすべての意味を見出さなければならぬわけではない。先輩から誘われてやりはじめた図書館での活動も、取り組むなかで意味を見出す。あとづけ

でかまわない。

なぜ、会社や役所は、職員を採用するときに主体性を重視するのだろうか。自分がなすべきことを自ら理解し、行動する。考えてみれば、仕事はこの繰り返しなのだ。自らやろうと思わなければ何もできないし、やらされ仕事は不満ばかりがたまってしまう。モノゴトを前に進めていくためには、主体性はとても大事なことで、これは学生協働の活動にもあてはまる。

3. キャリアを考える上で大切なこと

筆者は、大学でキャリア教育科目を担当する。入学直後のオリエンテーションで新生にむけて「キャリアも大学で学ぶことのひとつです」などと話をしている。大学で幅広い教養と深い専門性を身に付け、社会に羽ばたいていく。今も昔も大学というのはこうした教育機関なのだ。学生はいずれキャンパスを離れ、多くは就業の場へと自らの立ち位置を移行させる。

自分自身の興味・能力・価値観を理解し、合った仕事を選択するのがよい。だから自己分析をして、やりたい仕事、なりたい自分を見出して、そこを目指して就職活動すべきだ。これもひとつの考え方である。だが、現実には必ずしもそうではない。米国の心理学者・クランボルツは「18歳のときに考えていた職業についている人は、全体の約2%にすぎなかった」という調査結果を発表している。おそらく日本でも同じようなものだろう。筆者自身も今はキャリアの教育・研究を仕事としているが、18歳のときにも、22歳のときにも、まったくそんなことは考えていなかった。学生時代の目標どおりに歩んでいる人がいないわけではないが、決して多数ではないだろう。では、目指す方向と異なる道を歩むと不幸かということ、そんなことはない。働きながら見つけた道で、幸せにキャリアを歩んでいる人もいるという現実は、知っておきたい。

時間は流れているということ。世の中は変化するという。この点は重要である。ある時

点で存在した仕事ももしかしたら数年後にはなくなるかもしれない。新しい仕事が生み出されているかもしれない。同じ仕事であっても内容は変化する。数十年前の事務職にはそろばんが必須であっただろうが、いまやパソコンで簡単に計算できる。

一方で、自分自身も変化する。「やりたい仕事じゃなかったけれど、やってみたらけっこうおもしろい」というのはよくある話だろう。そもそも最初から仕事を完全にわかっているわけではないことに加えて、人間には変化に対応する力が備わっているからで、近年、この力の育成こそが重要だと言われている。米国の心理学者・シュロスバーグは、変化を受け止めた後に必要なものとして、「選択肢」「知識」「主体性」の3つをあげる。変化に対応するための様々な方法を知り、自分のことや仕事への豊富な知識を有し、各種リソースを活用して主体的に行動できることが重要だと言う。

とくに近年は変化の激しい時代と言われる。経済や政治、技術などが様々な要因で大きく変わる時代において、変化に対応する力を高めることが重要なのだ。それを支える力に「学習能力」がある。最初は自分に合った仕事でなくとも、やりたい仕事でなくとも、学習することで、適職にも天職にも変換できる可能性だってある。学習能力を高めるには、学習意欲を高め、学習習慣を身に付けること。学ぶことへの興味・関心、そして、継続的に学ぶ力が大切であって、大学ではまさにここを深めているはずである。自ら興味をもって主体的に学び、継続的に力をつけていくこと。少しずつであるかもしれないが着実な学びこそが学習能力を育成し、将来の変化に対応する力へとつながっていく。

就職活動を控えた学生には、「大学で学ぶことの意味を見出し、自ら主体的に学んだ経験が、就職活動でアピールできる」といささか抽象的ではあるが、そんなメッセージを発信している。と同時に、これは「現在進行形でなければならぬ」とも伝える。いま現在、プラスこれから

やることも含めて自己ピーアールを構成すべきということ。ただしこれは、卒論のテーマやゼミの課題に限定するものではなく、大学の講義・演習や、課外活動も含めた学習という意味である。

図書館の活動はそのひとつ。主体的に学べるチャンスでもある。図書館で新しい企画を打ち出したいと思ったら、企画の立て方を学ぶ。新たなサービスを実現するための利用者分析が必要ならば、統計学やマーケティングを学び、さっそく実践してみる。自らの学習を展開し深める場と、学生協働はなりうるのである。学生協働をキャリアの視点から考えるとき、実践学習の場との位置付けは重要である。

4. 社会の変化と図書館の役割

変化に対処するためには、まずは変化をとらえることが必要である。図書館はどうだろうか？ 書籍を購入して貸し出す役割、資料を所蔵するところなどと言った従来の役割だけではない大きな変化がある。IT化への対応、デジタル情報の管理・運用、学習の場所としての役割など。とくに近年は学習空間としてのラーニングコモンズや、学習支援のピアサポートなど新たな役割の担い手との議論が活発になってきた。これには、知識の一方的な伝授から学生の主体的な学びへと、大学教育への期待の変化が背景にあることは間違いない。

図書館も変わっている。変化に適応できないと困る。変化に気づかないのはもっと困る。そういう時代のなかで、図書館職員はもちろん、かかわる学生たちには、変化を感じる力を磨いてほしい。より積極的に「変化を巻き起こす人」であってほしいと願っている。

5. 協働とは何か

ところで、図書館にかかわる学生協働とは、どういう役割で、何をする人たちなのだろうか？ 八木澤(2013)は、学生協働とは、「図書館業務の一端を、職員とともに、利用者でも

ある学生が担う活動」と定義する。だがこの定義では、従来から存在する学生アルバイトと変わらない。わざわざ学生協働という呼称を使うこともなさそうだ。八木澤の定義はそこまでだが、そのあと学生スタッフの説明として「自発的・自律的に学習支援に関与し、図書館スタッフの一員としての働きをする」との記載がある。主体的に運営にかかわるスタッフの一人という点が従来のアルバイトとは異なる。

日高・岡田（2009）に明確な定義の記載はないが、「学生のキャリア形成教育支援やピアサポートによる図書館サービスの向上を目的とし、学生協働の事業に取り組んでいる」との記載で山口大学の学生協働を表現する。図書館サービスの充実とともに、かかわる学生自身のキャリア支援の観点が明確である。

そもそも山口大学図書館では、なぜ学生協働という呼称を用いたのだろうか？ 創設にかかわった図書館職員は、「職員と学生が協力して図書館づくりを行うという意味で“学生協働”という言葉を使った」と、当時を語る。何をすることが決まっていたわけではない。学生と職員がともに成長する場を目指してスタートしたと言う。

ここで「協働」という文字に注目したい。「共同」でもなく「協同」でもない。学生スタッフという呼称でも意味は通じると思われるが、あえてこの文字を使うところに深い意味がありそうだ。池田・福井（2012）のインターンシップに関する記述は“協働”の本質を、以下のとおり明快に語る。

人や組織が互いに協力する方法は、これまでは共同 (Co-operation) が主流でしたが、いま注目されているのは、協働 (Collaboration) です。前者は、達成すべき課題が明確で、作業を各自に分担することができるのに対し、協働は、関係者が一体となって、達成すべき課題あるいはその解決方法自体を創発し、実践するという違

いがあります。つまり後者は作業を分割できないということです。

この協働の精神にもとづき高知大学ではインターンシップ教育がなされ、大きな成果をあげている。ここで重要なことは、関係者が信頼コミュニティを形成し、そこにかかわる者すべてに利得が発生する仕組みを構築していることである。貢献や奉仕は、一時的に運用できたとしても持続可能ではない。継続していくためには企業にとっても利得のあるインターンシップの仕組みづくりが必要なのである。

これらを踏まえて図書館における学生協働は、「大学図書館の運営に主体的にかかわる学生活動」と定義してはどうだろうか。「協働の精神に基づき」という言葉を加えてもよいかもしれない。図書館をよくするという大きな目標にむけて、館長ほか職員は邁進する。そこに学生スタッフもかかわる。分担ではなく、協力して働く。関係者が一体となって、達成すべき課題あるいはその解決方法自体を創発し、実践する。そこにはもうひとつの視点である「学生自身のキャリア形成」も利得のひとつに含まなければならないし、職員はここにかかわることになる。

当然ながら、どのような図書館をめざすのかという図書館の理念が必要であるし、学生協働の理念も必要である。方法論はあとでよい。この理念こそが重要なのである。休日や夜間のカウンター業務を担当する学生、返却図書を収納する学生、データを打ち込む学生など、従来の業務分担ではない関係が、ここにある。学生協働は、図書館という空間と機能を支える自律的な一主体としての存在でなければならないと考える。

6. 学生の協働の意義を見出す

これまで論じてきたことは筆者の見解であって、これが唯一の正解というものではない。様々な見解があつてよい。図書館協働にかかわ

る学生たちには、自分が取り組んでいることへの意義を自ら見出し語ってほしいと願っている。学生協働はどうあるべきか。ここで筆者が考える学生協働の学生たちに求められる視点を述べたい。

ひとつは、図書館マネジメントへの参画を意識すべきということ。本が好きだから、図書館が好きだから、参加している学生が多いだろう。きっかけはそれでよい。が、活動するなかで、マネジメントの視点を学んでほしい。とくに重要なことは、利用者視点、学生視点の投入ということ。職員が気付かない部分に強みを発揮できる。

総合図書館の閲覧コーナー入口近くの「キャリア学習・就職活動支援コーナー」は、学生協働メンバーの発案で誕生した。大学生にとって就職活動はおおきな関心事であり、図書館で何かできないかと学生と職員が一緒に考えて実現した取り組みのひとつである。いわゆる就活マニュアル本ではなく、就職活動を学び、自分のキャリアを考えるための書籍が並ぶ。とともに、全学の就職掲示板での情報提供や情報誌の配布コーナーを置くなど、キャリア学習の情報拠点ともなっている。書籍紹介のポップをついたり、キャリア教育の授業と連動した企画を行ったり、学生協働の活動は続いている。このほかにも、館内の表示や特設コーナーの運営など、図書館の目標のもとに、自らかかわれると



総合図書館「キャリア学習・就職活動支援コーナー」

ころは多くあるだろう。マネジメントへの参画を意識してほしい。

もうひとつは、自分の「キャリアを育む場」としての位置付けである。好きだから・楽しいからを超えて、学生協働の活動を通じて生きる力・働く力を身に付けてほしい。自ら主体的にかかわる活動は、キャリア学習の場との意味を見出すことができる。何かを実現するためには立案や交渉が必要で、たいていの場合、そこに多くの困難に遭遇する。経験から学べることは数多い。この点は学生だけというよりは、メンターとなる職員が少しかかわってあげるとよい。単なる活動だけに終わらせない少しの工夫が必要だろう。作業を分担する学生ということではなく、彼ら彼女らの成長にかかわる役割を図書館職員は担っている。この認識を強くもってほしい。

7. キャリアから考える学生協働

本稿では、学生協働に求められることを図書館の外からの視点で論じてきた。図書館がよりよくなるこの活動は、利用者にとっても大学にとっても大切な取り組みである。加えて、かかわる学生や職員の成長が期待される点からも、極めて有効な活動になりうる。

最後に、学生協働にかかわる学生と職員への期待を込めて、これから考えておくべき課題を指摘したい。

学生協働の理念を明確にする

図書館の大きな方向性のなかで、学生協働の理念を明確する必要がある。ディズニーテーマパークは「ハピネス（幸福感）を提供し続ける」という明確な理念を掲げ、そのもとに働くキャストたちは自ら何をなすべきかを考え行動すると言う。学生協働はいったい何を指すのか。自分たちの立ち位置を明確にする作業は必須だろう。

達成すべき課題と方法論は、あとで皆で考えればよい。主体的に考え、行動する。利用者視

点を大切に、学生目線の強みを発揮してほしい。

図書館以外のことに

興味を持つ、考える、動く

図書館が好き、本が好き。これは素敵なことではあるが、学生協働に求められるものは図書館マネジメントへの参画である。図書館に興味があることはよいことである。が、変化の時代に変化をリードする人材になっていくためには、他の知識がないといけない。変化に対応するには知識がいる。知識を知恵に変換して行動を起こす力がある。他を知らないとアイデアも出てこない。

図書館に貢献するためには図書館以外のことに興味を持つ。このことを肝に銘じてほしい。新聞を読む、インターンシップに参加するなど、ビジネスを学ぶ機会はたくさんある。貪欲に学ぶ姿勢を大切にしてほしい。「図書館にしか興味がありません」と言う人に、図書館が変えられるだろうか。変化の時代だからこそ、重視してほしい観点である。

組織運営を学び、

チームで働く力を身につける

学生協働はチームである。しかも、年齢が近い学生だけでなく、歳が離れた教職員とも一緒にチームに属する。ここで活動することで組織運営を学び、コミュニケーションの力を高めることができる。仕事は個人で成し遂げるものではなく、たいていはチームでなされる。図書館での多年代の混成チームの経験は、働く力を高める上で貴重な経験となるだろう。

職員からすると学生たちは、パートナーでもあり、部下であるかもしれない。次代を担う若者を育てるという意味で、おおいに鍛えていただくという視点もまた、大切である。協働を担う図書館職員の役割は大きい。

変化の激しい時代だからこそ、変化に対応し、

変化を自らつくっていく。そんな若者が求められている。学生協働はまさにその力が身につく場と言えるだろう。なにより重要なことは、どんな図書館にしたいのか、学生協働は何を実現するのかという理念であり、もうひとつは、この経験を通じて自分のキャリアを高めるといふ学生自身の自覚である。キャリアの視点を持って日々の学生協働の活動に取り組むことを期待したい。

(学生支援センター 教授)

【注】

1) この学生協働シンポジウムの様子は、以下のWEBサイトで公開している。
<http://www.lib.yamaguchi-u.ac.jp/LA/sympo2014/>

【参考文献】

- 池田啓実・福井美和「長期社会協働インターンシップ(CBI)の価値・特長・成果」, Collaboration (高知大学教育研究部総合科学系地域協働教育学部門), Vol.2, 2012.3, pp.21-33
- 八木澤ちひろ「大学図書館における学生協働についてー学生協働まっぶの事例からー」, カレントアウェアネス(国立国会図書館), No.316, 2013.6, pp.10-14
- 日高友江・岡田隆「学生協働(Library Assistant)によって変わる図書館サービス: 山口大学図書館の実践」, 大学図書館研究, No.87, 2009.12, pp.9-14